



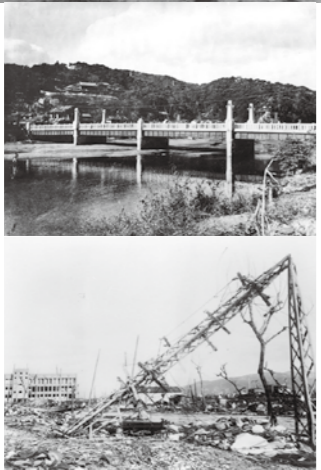
建物の疎開のために 広島へ向かった 玖波・小方・大竹の **義勇隊**



昭和19年に入り、太平洋戦争の戦況が悪化する中、国民総動員のもと編成された国民義勇隊。
 昭和20年8月の初めに、玖波、小方、大竹の役場にそれぞれ、建物疎

開の動員命令が出された。動員開始日となる6日は、広島市以外のまちから約1万人が建物疎開作業に動員されることとなっていた。
 命令を受けた玖波、小方、大竹の人たちは作業服に身を固め、玖波隊105人は玖波駅から、小方隊は86人のうち26人が玖波駅、60人が大竹駅から、大竹隊は798人が2便に分かれて大竹駅から電車で広島へと向かった。
 各隊は己斐駅到着後、小方隊は土橋・十日市付近へ、玖波隊は小網町付近へ、大竹隊の先発隊は、天満町付近に到着し、作業にとりかかろう

(上)先発の大竹隊が被爆した天満町にある天満橋のようす。電柱が倒され、まちは形はない。
 (中)後発の大竹隊が、この己斐橋を渡って目的地に向かおうとしていたときに爆発が起こった。ここでもかなりの衝撃波が人々を襲ったという。
 (下)小方隊が作業にとりかかろうとしていた土橋付近のようす。鉄柱は折れ、見える建物も骨組みだけとなっている。【写真：広島平和記念資料館提供】



突然の惨劇に遭遇した大竹の民

昭和20年当時、大竹市域に住んでいた旧制中学生以上の学生は、ほとんど広島市の学校に通っていた。その多くの学生が学徒動員命令により、事業所・工場での作業や建物疎開に従事し、全労働者の4分の1が学徒動員の学生であったとも言われている。

広島で散った
 大竹の若い命

動員 学徒

としていた。また、後発の大竹隊は、己斐駅から目的地の小網町に向かうため、己斐橋を渡って福島橋へと向かっていた。そして迎えた8時15分。原子爆弾の爆発により、まちは一瞬で焦土と化し、玖波隊、小方隊、大竹隊の先発隊は、ともに爆心地に近かったため多くの行方不明者、負傷者を出した。玖波隊と小方隊は大竹に帰ってきた人もいたが、次々と亡くなっていき、全滅状態となった。大竹隊も先発隊の死者・負傷者が多く、80人を超える人が亡くなるなど、大きな被害を出した。



(右)原爆ドームの南側に建立されている動員学徒の慰霊塔。これから伸び行く若者が命を絶たれたことから、塔は逆三角形のような形状となっている。(上)建物疎開を描いた絵。空襲による延焼を防ぐために、市内中心部の約130の建物の取り壊しが行われていた。【所蔵：広島平和記念資料館】
 【参考資料：大竹市史】

8月6日は、爆心地から1〜2キロの範囲内で建物疎開の作業が行われていた。数万人もの学生が作業を行っていたなか、原子爆弾が投下。爆心地から近かったこと、また、外で作業する生徒が多かったこともあり、多くの生徒が帰らぬ人となった。6,000人以上の生徒が亡くなったなかで大竹市域の学生も120人以上が犠牲となった。



記憶の跡

大竹と原爆

-the damage of the atomic bomb was in otake-

昭和20年8月6日、澄み切った青空。深夜から空襲警報が発令されるも、朝には解除され、多くの市民は防空壕や避難所から帰宅し、いつもの生活に戻りはじめていた。あの瞬間までは――。

閃光と轟音――一瞬でまちが消えた

広島

昭和20年春、アメリカで始まった原子爆弾の投下目標都市の検討。7月25日には、広島、小倉、新潟、長崎の4都市に選ばれ、8月2日に、広島が第一目標に決定した。
 8月6日運命の日。広島市の東北方向から、上空に現れたB29爆撃機「エノラ・ゲイ」は、当時はT字橋であった相生橋を目標に、人類初となる1発の原子爆弾を投下した。

爆弾は、広島県産業奨励館（今の原爆ドーム）の近くにあった島病院の上空約600メートルで爆発。すさまじく光を放った後、轟音とともにまちを襲ったことから、当時の人々は「ピカドン」と呼んだ。爆発による熱線と放射線、衝撃波は、一瞬にしてまちを破壊し、まちの中心にいたおびただしい人々が、逃げる間もなく亡くなった。
 熱風と衝撃波は、まちの泥やチリを巻き上げ、また火災によるススや暖められた空気と一緒に上昇し、空気中の水と混ざって、黒い雨をまちに降らせた。

人類初の原子爆弾が投下された広島。アメリカが広島を目標に決めた理由の一つが目標都市の中で唯一連合国軍の捕虜収容所がないと思われていたことがあった。目標に決定した広島は、原子爆弾の投下まで空襲が禁止されていた。そのため、広島の人々は日本の多くの都市が空襲されるなかで、大規模な空襲がないのを不思議がっていたとも言われている。写真は安佐南区古市から見たきのこ雲。【写真：広島平和記念資料館提供】

意識が朦朧とした状態で逃げる中、揺れ動く赤黒い太陽は丸には見えませんでした。

6 日は、市内の中学生全員が疎開作業の日でした。他校が市内の現場に直接集合する中、私たちが通う比治山高等女学校では、校長先生の指示で学校に集合してから作業現場に行くことになっていました。そのため、比治山高等女学校の生徒は、原子爆弾の直撃を避け、多くの生存者を出しました。校長先生は自身の空襲体験から、気象と空襲の関係の研究について、爆弾投下の前夜が星の美しい快晴で、無風であったことから、空襲の確率が高いと判断し、現場到着を遅らせる手段を講じたということ、後に知って驚きました。現場集合だったら私は生きていません。先生のおかげで今の私は生かされていると感じています。

爆発のときは、ちょうど学校の教室にいました。すごい音が響き渡り、音がやんでから立ち上がって見ると、まわりにいた人たちがいなくなり、中央に4、5人が血だらけで倒れていました。急いで校舎を飛び降り、家に帰ろうとしたら、西側の道路は

通行止め。仕方なく人の流れに乗って東側へ逃げました。しかし、意識が朦朧として、どこをどう歩いたのかまったく覚えていません。ただ、揺れ動く赤黒い太陽の形が、丸には見えなかったのを覚えています。翌日、家へ帰ってみると、木の部分は全部燃えて瓦だけが屋根の形に残っている中、母が手を組み、祈るような姿勢のまま亡くなっていました。核兵器は一瞬で多くの人の命を奪います。身を持って核兵器の怖さを知っているからこそ、これからも核兵器の廃絶を訴えていきたいと思っています。



大石雅子さん(81歳 元町4)
当時は比治山高等女学校の学生。原子爆弾の爆発時は学校の中にいた。

中で「こがあなつらい目に、なんで遭わんにゃいけんのかいのう」という発言がありました。私にもそんなつらい目に遭ってはいけません。そう強く思います。

記憶の跡

原子爆弾投下から69年。当時を知る人は、年々少なくなっています。あの日の広島はどうだったのか。当時のようすを知るかたがたにお話を伺いました。

私 は、昭和20年4月に母と妹と母の実家がある玖波に移り住みました。当時私は13歳。広島市第一中学校に編入できたものの、学徒動員で南区の大洲にあるネジ切りの工場で働かされることになりました。「勉強す

江藤岩雄さん(82歳 玖波6)

当時は学徒動員として南区の大洲にある工場に働いていた。工場に着いたときに原子爆弾が爆発した。



市内に架かる橋は燃え、けがをした腕をかばいながら、川を渡るのはとても大変でした。

るために学校に入ったのに」と、とても傷ついたので覚えています。8月6日の朝、いつものように工場に着いたとき、「ドン」と大きな音が鳴り、爆風が吹いたのですが、原子爆弾が落ちたことを先生も含めて誰も知りませんでした。とにかく家に帰らないといけないと思い、大洲から廿日市まで歩きました。帰る途中、広島市内に架かる橋が燃えていたため、川の中を歩いて向こう岸まで渡らなければいけません。爆風で飛んできたガラスで腕がパツクリ割れていたため、その傷をかばいながら渡るのとはとても大変でした。廿日市に着いたのは7日の午前1時頃。そこからは電車に乗り、無事家に帰りました。その後、玖波の国民学校が救護所となり、たくさんの方が運ばれてきました。それから毎日のように、死体を燃やす赤い炎が家から見えていたのを覚えています。異様な光景でした。8月15日に玉音放送が流れたときは「やっと戦争が終わった」という気持ちとこれからの期待でいっぱいでした。だんだん被爆者の数が少なくなり、平和祈念式典を守り、当時の様子を語り継ぐことは我々だけでは難しくなっています。行政として、平和をどう考え、どう訴えていくか、考える時期にきていると感じています。



今井良子さん(83歳 白石2)
当時は広島駅の近くに住んでおり、家にいたときに被爆。家の下敷きになったが一命を取り留めた。

ピカッと光ったと思ったら家の下敷きに。辺りはとても静かで真っ暗でした。

昭和 和20年当時は、広島駅の裏にある練兵場の近くに住んでいました。6日の朝は、広島駅にいましたが、空襲警報が鳴ったので急いで家に帰りました。そして家に着いたときに、ピカッと光ったと思ったら、次の瞬間には家の下敷きになっていました。気が付くと、辺りはとても静かで真っ暗でした。瓦礫の中にかすかに光の射す方向に向かって外に出てみると、辺り一面焼け野原になっていました。心配して家まで探しに来てくれた叔父が、裸足で立っている私を見つけてくれました。その後、父が大やけどで治療を受けていると聞いたので、急いで父のところへ駆けつけました。父は、顔が真っ黒に焼けて腫れて横たわっており、会っても父とはわからないくらい変わり果ててい

ました。父は「十日市町で大きなトラックが火の玉になって飛んできて、その下敷きになった」と言っていました。横たわる父のまわりにはたくさんの方が同じように倒れており、皆口々に「水、水」と言っていました。あげてはいけなと言われていましたが、苦しそうな姿に耐えきれず、父にもまわりの人にも水をあげたのを覚えています。その後、叔父に連れられて大竹に帰ってきました。大竹では建物被害はありませんでしたが、被爆した人がある家庭では、薬を塗っても体には虫がくるため、治療などの手当てに苦労していたのを覚えています。このような悲惨な状況は二度と繰り返してはいけません。特に人類を全滅させる核戦争は絶対にあってはならないと思います。

広島の子のあちらこちらから火の手が上がり、焼野原になるのを震えながら見ていました。



川手廣司さん(85歳 白石1)

当時は学徒動員として南区の機甲訓練所に通っていた。また、川手さんは原子爆弾投下より前にあった呉市の空襲も経験している。

その後、己斐駅まで走って逃げましたが、道中に架かる橋のたもとには、「水をください」と繰り返す人たちがあふれ、川には死体が流れていました。荷馬車の馬が腹から煙を出して死んでいたのも覚えていません。そのような中、何とか家まで帰りましたが、体調が悪くなり髪も抜け、何日間も寝こみました。

以前、広島市長が平和祈念式典の

学び、平和を考える **展示**
平和へのおもい



「平和へのおもい」と題して、ミニミニ原爆展をはじめとする、平和に関する資料を展示。この機会に「平和」について考えてみませんか。

とき 8月1日(金)～9月1日(月) (午前中)
 ※ 閉館時を除く。

ところ 総合市民会館ロビー

内容 原爆パネルの展示、大竹港海外引き揚げの記録やアニメ「めぐみ」のDVD上映。また、大竹海兵団に関する資料も展示。そのほかにも原爆に関する書籍の紹介も行います。



「八月の青い蝶」
 作 周防柳
 学生時代を大竹で過ごした作者のデビュー作。「昭和20年8月の朝、広島。果たさねなかつた一つの約束」。広島や大竹の情景の描写が物語の理解を深める。

原爆の日
 終戦記念日に
 黙とうを

広島市・長崎市に原爆が投下されて69年。原爆によって死没された人々の冥福と世界の恒久平和を祈って、1分間の黙とうを捧げましょう。

また終戦記念日には、東京で全国戦没者追悼式が行われます。戦没者の冥福を祈りましょう。原爆の日および終戦記念日には、防災無線でサイレンを鳴らします。

原爆の日
 広島市 8月6日(水) 8時15分
 長崎市 8月9日(土) 11時2分
終戦記念日 8月15日(金) 12時

問い合わせ 企画財政課 ☎2125

人類初の原子爆弾が広島に投下されて69年。被爆者は高齢化し、当時を知る人は減少しています。平和な世の中が当たり前と思う人たちがいるかもしれませんが、しかし、今の日本の平和な姿が稀であることを自覚して、原子爆弾の投下を繰り返すことのないよう、戦争の悲惨さ、平和へのありがたさを伝えていく責任が私たちにあります。

大竹の国民義勇隊や動員学徒が、広島市内で被爆し、多くの人が亡くなるその日まで。



心に刻み、伝えゆく
 忘れてはいけない
 広島に原子爆弾が落ちたことを。
 多くの大竹市民が亡くなったことを。

なりました。その他、探しに行く人、手当をする人など、大竹は原子爆弾と深い関わりがありました。当時を知る4人の方に、たどってもらった当時の記憶。当時の話は経験した人しか分からない、想像を絶することであつたのだと感じました。経験談や想いを心に刻み、風化させることなく被爆地ヒロシマから平和への想いを発信していかなければいけません。戦争がこの世からなくなるその日まで。



みんなで折った千羽鶴の前で歌いながら、平和への思いを一つにする児童たち。



石田萌々花さん(6年)

みんなでつくった折り鶴。6日の平和祈念式典ではみんなの願いを込めて、奉納したいと思います。戦争は多くの命が奪われ、してはいけないと思います。一人一人が自分の意見を持ちつつも、周りの人の意見を受け入れて、争いをすることのない、楽しく平和な世の中になればいいなと思っています。

捧げる平和への誓い
祈り

平和な今を生きているからこそ、平和の尊さを学び、平和への願いを折り鶴に託す子どもたちの姿があつた。

「世界で初めて原子爆弾が投下された広島。心一つにして平和への第一歩を踏み出しましょう」。体育館に児童の力強い言葉が響きます。7月11日に玖波小学校で平和朝会が開かれました。全校児童で平和への祈りを込めてつくった折り鶴。各学年の代表児童が「世界中がけんかをしないで仲良くいられるようにクラスの中でもみんな仲良くします」など、それぞれの平和への誓いを宣言し、折り鶴を捧げていました。全校児童の祈りが込められた千羽鶴は、8月6日に行われる原爆死没者追悼平和祈念式典で奉納されます。



大竹ヒロシマの日
原爆死没者追悼平和祈念式典

問い合わせ 市原爆被爆者協議会 (藤川宅) ☎2933

8月6日(水) 8時～8時45分
原爆慰霊碑「叫魂」前(総合市民会館前)